釧新郷土芸術賞に輝く受賞者の横顔 ■下■

音楽（作曲）

石丸 基司氏(35)
（釧路市緑ケ岡1の10）

「つたない子ですがみな我が分身」と石丸さん

創作活動に意欲
クラシック20曲を世に送り出す

「20作品はみな我が分身」

九〇年代前半の日本作曲界の大きな収穫のひとつと評価された箏協奏曲「大地は霧色に沈む」や、上海国際作曲コンクール入選のピアノ曲「バットゥータ・ブルレスカ」など、石丸さんはこれまで約二十のクラシック曲を制作してきた。「これまでの二十作品は、つたない子ほどかわいいということで…みな我が分身ですね」と語る石丸さんの作曲活動の根幹には、音楽への親愛の念がある。

伊福部昭氏に師事して勉強

音楽らしい音楽を書けるようになったのは、上海コンクール入選作の頃からという。「私にとって音楽とは、構成がしっかりしていて、もう一度再会したくなるような曲。構成の良い作品というのは時間的な興味の持続を獲得した作品です」と音楽感を語る。釧路北陽高校を出て東京音楽大学に入学したが、釧路出身で当時の学長だった伊福部昭氏に師事してさらに作曲を勉強し、卒業後も同氏のアシスタントをつとめたりした。今、石丸さんの自室には〝大楽必易〟と墨書された伊福部さんの色紙がかけられている。「〝史記〟の言葉で、良い音楽は必ず分かりやすいものだという意味です」

平成三年に内臓疾患のため帰釧し療養につとめつつ、父の博司さんが経営する東家（城山）を手伝い、三年前に結婚して一女の父ともなった。「東京から帰釧した時は、少なくとも〝情報の嵐〟から脱け出られたと思った。今の日本の現代音楽は、再会を願いたくない曲が多い」とも言う。若手音楽評論家の片山素秀氏は石丸さんの八十年代後半からの仕事について「荒々しい土着的生命力、あるいは真のやさしさに満ちた簡素な叙情―それらの探求の軌跡を認める」との讃辞を贈っている。

道東の自然、風土を念頭に

この北海道―道東の自然、風土を念頭にしつつ、新しい音楽の地平を切り拓きたい。「これからオーケストラ曲を中心にパワフルな創作をしたい。釧路の邦楽の方がたと組み、来年開かれる〝箏の祭典〟で自作の演奏・指揮をする予定です」と音楽への情熱を語る。